

平成22年6月7日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19520430
 研究課題名（和文）ミニマリストプログラムにおける英語の前置詞句の統語的・意味的研究
 研究課題名（英文）A Syntactic and Semantic Study of English Prepositions in the Minimalist Program
 研究代表者
 鈴木 英一（SUZUKI HIDEKAZU）
 獨協大学・外国語学部・教授
 研究者番号：30004071

研究成果の概要（和文）：

- (1) 前置詞の共起制限に関して、名詞句に加えて形容詞句・副詞句・前置詞句や節要素を補部として取ることができる前置詞もあり、範疇選択を規定する必要がある。
- (2) 前置詞句の文中の位置としては、前置詞句の意味に依存するが、副詞的修飾語として文頭・動詞句末・文末、さらに、助動詞の位置も可能である。
- (3) 前置詞句の意味解釈のためには、前置詞に基本的な意味を設定し、名詞の意味はクオリア構造の構成クオリアと目的クオリアを用いる方法が有望である。

研究成果の概要（英文）：

- (1) Prepositions can be found to take not only NPs but also APs, AdvPs, PPs and CPs; so categorial selections must be specified for prepositions just like verbs.
- (2) PPs can appear not only in sentence-initial position, VP-final position and sentence-final position but also in mid-position or auxiliary position, depending on their meanings.
- (3) The semantic interpretation of PPs can be suggested to be made in the following way: (i) A small number of Proto-meanings can be assumed for prepositions; (ii) The semantic properties of nouns can be specified in terms of Qualia structure, especially by Constitutive and Telic Qualia.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	800,000	240,000	1,040,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：文法

1. 研究開始当初の背景

(1) 英語の前置詞と前置詞句に関してはこれまで相当な研究があるが、最も多いのは前置詞と前置詞句がどのような意味を表すかということ、特に慣用的な前置詞句のように典型的な前置詞句の表現がどのような意味をもち、どのように用いられるかに関する研究が中心である。しかし、前置詞句は、慣用的な例を除くと極めて生産的であるので、前置詞句の生産性に着目して研究することが必要になる。

(2) 最も優れた記述文法である Quirk et al. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language* においても、前置詞句は、ある前置詞句がどのような意味を表すかという点から説明されており、前置詞句が生産的であることを考慮すると、どのような前置詞とどのような名詞句の結合が可能であるか、また、前置詞と名詞句から形成された前置詞句がどのような意味を表すかを明らかにする仕組みや手続きを明らかにする必要がある。

(3) 前置詞句の文中における位置に関しては、Jackendoff (1977) *X-bar Syntax* などの生成文法の研究において、どのような構造的な位置を占めるかということを中心に説明されているが、どのような意味を表す前置詞句がどのような位置に現れるかについては十分に明らかにされていないので、前置詞句の意味と生起位置を明らかにする必要がある。

(4) 前置詞は補部として名詞句をとり、補部として節をとる補文標識や従位接続詞と対照的であると一般に考えられているが、前置詞句の中には名詞句以外の要素を補部として取るものもあるので、どのような前置詞が名詞句以外の補部を取るかを明らかにする必要がある。

2. 研究の目的

(1) 英語の前置詞句は、主要部が前置詞で、その補部として名詞句が用いられている「前置詞+名詞句」という形をしており、主要部である前置詞は多くの場合に意味的に曖昧であるために、全体としての前置詞句も多義的になり、文中で多様な機能を担うことになる。このような前置詞句の意味的多義性と統語的・機能的多様性を説明するために、前置詞の用法を十分に解明し、前置詞とその補部としての名詞句との関連性を検討し、前置詞句全体の特徴を明らかにする。

(2) 前置詞句全体の意味がどのように決定されるかということ明らかにするために、前置詞と名詞句との間にどのような共起制限があるか、また、その共起制限はどのように捉えるべきかという問題を研究する必要がある。前置詞と名詞句の共起関係によって

前置詞句全体の意味を捉えることは、前置詞句の文中での機能や認可条件の研究にとって特に必要である。

(3) 形容詞と形容詞的前置詞句との間、および、副詞と副詞的前置詞句との間には、統語的・意味的な面に関して類似点もあるが、注目すべき大きな違いが見られる。その違いは、形容詞的であれ副詞的であれ前置詞句は「前置詞+名詞句」という構造をもつ極めて生産的であり、形容詞や副詞と異なり、単一の言語表現として前置詞句は辞書に記載することができないということである。そこで、生産的な前置詞句の特徴を明らかにするためには、まず、前置詞句を構成する前置詞と名詞句の特徴から意味解釈を行う必要がある。例えば、“at the top of the tree”と“at the top of the class”は、前者が「木の先端」という場所を表し、後者が「クラスで一番」という成績の状態を表しているという意味解釈を与えて、両者を区別する必要がある。次に、このような意味解釈に基づいて、前置詞句の統語的・機能的特徴を明らかにして、文における共起制限を説明するための認可条件を明らかにする必要がある。

(4) 要約すると、本研究では統率・束縛理論とミニマリストプログラムを中心とする研究を踏まえ次の問題を中心に研究する。

- ① 英語の前置詞句が文の構造においてどのような位置を占めるか。
- ② 前置詞句が生ずる位置の違いによって機能がどのように異なるか。
- ③ 前置詞句は意味的にどのように曖昧であるか。
- ④ 意味的な曖昧性はどのような場合にどのような形で解消されるか。
- ⑤ ミニマリストプログラムにおける Merge と Move という操作によって多種多様な前置詞句がどのように生成されるか。

3. 研究の方法

(1) 初年度には、前置詞および前置詞句の特徴を、これまでの英語の前置詞句の用法に関する研究、例えば、Bennett (1975) *Spatial and temporal uses of English prepositions*, Quirk et al. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, O' Dowd (1998) *Prepositions and Particles in English: A discourse based account*, Cole (2006) *The Preposition Book: Practice Toward Mastering English Prepositions*. などに基づいて前置詞の意味を詳細に明らかにし、それに基づいて、前置詞を主要部とする「前置詞+名詞句」という前置詞句全体がどのような意味を表すかについて検討を行った。

このような前置詞と前置詞句の意味と用法を実際の例文で検証するために、辞書や辞

典を活用するとともに、Brown Corpus やLOB Corpus やLUND Corpus 等の言語データベースを駆使して、次の点を中心に研究を行った。

- ①前置詞の意味と用法を、形容詞的用法と副詞的用法に着目しながら、伝統文法・記述文法や具体的な多くの例に当たって、詳細に検討した。
- ②前置詞句の用法を説明するためには、前置詞の意味をどのような観点からどのような概念を用いて捉えるべきかという問題を、記述文法や生成文法などの文法理論や言語理論における説明を参考にしながら、検討した。
- ③前置詞がどのような名詞句と共起する場合に全体として前置詞句がどのような意味解釈をもつかという問題を、前置詞の基本的な意味と前置詞の目的語である名詞句の意味内容と適合性・共起制限という観点から検討した。
- ④副詞的な機能を担う前置詞句が具体的に文中でどのような位置に生じてどのような意味・機能をもつかを検討した。
- ⑤文中で異なる位置に生ずる前置詞句の修飾関係の相違点を明らかにし、そこに関与する要因を検討した。
- ⑥広範囲な資料とこれまでの研究を基礎にして、英語の前置詞句に見られる様々な共起制限を考察した。

(2) 2年目には、初年度の伝統文法・記述文法と言語データベースを用いた研究を踏まえて、そこで明らかになる問題点を整理し、さらに、Jackendoff (1973) “The base rules for prepositional phrases,” Jackendoff (1977) *X' -Syntax*, Jackendoff (1990) *Semantic Structures*, Rauh (ed.) (1991) *Approaches to prepositions*, Schweikert (2005) *The Order of Prepositional Phrases in the Structure of the Clause* などの生成文法の研究を検討し、前置詞句の意味解釈の手続き・方法と前置詞句の特徴・用法に関する理論的な説明方法の検討を行った。

- ①前置詞と名詞句の意味の概念化を検討し、前置詞句全体の意味解釈を行う手順を検討した。
- ②副詞的用法と形容詞的用法を中心にして、前置詞句が表す意味とそれらが実際に生ずる位置・構造の特徴を検討した。
- ③前置詞句の認可条件を規定することを目指して、前置詞句がもつ様々な共起制限が前置詞句の統語的・機能的・意味的特徴及び共起する要素の特徴とどのように関わるかを検討した。

(3) 最終年度は、過去2年間の研究で得られる成果と知見に加えて、Johnston (1994) *The Syntax and Semantics of Adverbial Adjuncts*, Lindstromberg (1998) *English prepositions explained*, Feigenbaum & Kurzon (2002)

Prepositions in their Syntactic, Semantic and Pragmatic Context, Tyler (2003) *The Semantics of English Prepositions*, Saint-Dizier (2006) *Syntax and Semantics of Prepositions* などの記述的・理論的研究を踏まえて、前置詞句の生起可能性、共起制限、可能な意味解釈を中心に、前置詞句の認可条件の検討を行った。

- ①前置詞句の用法・特徴を説明するために、前置詞句の意味と生起位置と担う機能に基づいて前置詞句の下位分類を行った。
- ②それぞれの下位類の前置詞句が生ずる具体的な文の線状的・構造的な位置の可能性を統語的制約として定式化を試みた。
- ③前置詞句の様々な共起制限を説明する仕組みを、前置詞句の語彙的・統語的特徴と実際の生起位置との適合性に基づいて定式化を試みた。
- ④ミニマリストプログラムの枠組みにおいて、ほとんどが随意的な用法をもつ多種多様な前置詞句がどのように文の構造に導入・生成されるかについて検討した。

4. 研究成果

(1) 前置詞という品詞・文法範疇に関して

前置詞は〈閉じられた語類〉と呼ばれ、その構成員は増加しないと言われているが、Quirk et al. (1985, pp. 667-8) が〈周目的前置詞〉と考えている、bar, barring, concerning, considering, excepting, excluding, failing, following, given, granted, including, less, minus, pending, plus, regarding, respecting, save, wanting, times, over, worth に加え、granting や witness のような語は前置詞として用いられるようになっている。特に、given と granting という語は、give と grant という対応する動詞の範疇選択という共起制限を考慮すると前置詞であると考えべきである。

(2) 前置詞の範疇選択に関して

前置詞は補部として名詞句という範疇を選択し、節を範疇選択する補文標識や従位接続詞とは対象的であると考えられている。しかし、一般的な前置詞である from は、“from behind the curtain”のように前置詞句を補部として取ることも、“from here”や“from now”のように場所や時を表す副詞を取ることもできるし、また、“far from perfect”, “far from elegantly”, “far from originally”のように形容詞句やly-副詞も生ずることができる。“given that it was further than any mountain I could see”のような場合は、given の補部に that 節すなわち CP 要素が生じているという点で、従位接続詞 if が“if (*that) it was further than any mountain I could see”のように、

that のない IP を取り, that を伴う CP を取ることができないことと大きく異なっている. さらに, 上記の例における given は, 「与えられる」と「考慮すると」というほぼ同じ意味で補部として NP と CP を補部にとることができるので, give という動詞の受動態の分詞構文ではなく, すでに前置詞となっていると考えるのが妥当である. このような共起制限を説明するためには, 少なくとも一部の前置詞に関しては範疇選択を指定する必要がある.

(3) 前置詞句の文中の生起位置に関して

前置詞句は名詞句内では, “the cottage in the wood” や “the climate in the country” のように名詞に後続する位置に生ずるという点で, “a project difficult to carry out” や “a person eager to work at home” における下線部のような複雑な形容詞句と似ている. 名詞の後位修飾語としての用法以外の前置詞句は副詞句とほぼ同じ位置に生ずることができる. すなわち, 前置詞句は副詞句と同じ, 文頭・助動詞・動詞句末・文末の位置に生ずることができる. しかし, 前置詞句が助動詞の位置(主語と動詞の間の位置)に生ずる場合は注意が必要であり, Jackendoff (1977) では前置詞句は助動詞の位置には生じ難いとされているが, いわゆる〈文副詞〉に相当する前置詞句はかなり自然に助動詞の位置に生ずることができる. 注目すべき点は, 〈動詞句副詞〉と呼ばれる様態・手段・道具や時や場所を表す副詞に相当する前置詞句は決して助動詞の位置には生ずることができないという点であり, これは典型的に接尾辞-ly を伴う動詞句副詞と著しく異なっている.

この事実を説明するためには, 前置詞句の意味として, 文副詞に相当する意味とそれ以外の意味を区別する必要がある. 文副詞以外の意味を表す前置詞句は, 名詞の後位修飾語の場合と同じく主要部に後続する位置に生ずるような制約が必要ということになる.

また, 文頭の位置は, 動詞句末・文末の位置と比べ生起可能性の制限がより強く, 文頭の位置に複数の前置詞句が生ずることは一般には困難であること, また, 一つの前置詞句が文頭の位置に生ずる場合も, 談話の流れを考慮した情報構造, 特に話題提示という機能や作用域が強く関係していることを考慮する必要がある.

さらに, 文末の位置に関しては, 文頭と較べると, 複数の前置詞句がかなり自由に生ずることができるが, 複数の前置詞句が生ずる順序は少なくとも三つの要因, ①述語動詞との選択関係・親疎関係, ②出来事を記述する際の前置詞句の内容の作用域, ③情報構造特に焦点化という三つのことが関わっていることが明らかである.

(4) 前置詞句の意味解釈に関して

前置詞句は生産的な言語表現であるので, 慣用的な表現以外の前置詞句の意味は辞書に記載することができない. そこで, 文全体の意味解釈のためにも, 述語動詞との意味選択のためにも, さらに, 前置詞句の文中での位置を説明するためにも, 前置詞の意味と補部の名詞句の意味から前置詞句全体の意味解釈を与える仕組みが必要になる.

前置詞句の意味については, Lindstromberg (1998) のように, 場所・時間を基本的な意味と考え, それ以外の意味は比喩的な拡張によって得られると考えられることがあるが, これでは不十分である. 前置詞句が表す意味にはかなり多くのものがあり, 状態・属性・様態・手段・道具・行為者・随伴者・受益者・時間・期間・頻度・機会・場所(近接・遠隔・接触・非接触地点)・方向(着点・起点)・経路・原因・理由・置換という意味が重要であり, これら全てを場所と時間によって説明することは難しい.

母語話者の言語獲得の事実を説明するためには, 前置詞句の多様な意味をより少ない前置詞の意味から与えることができると考えることが有意義である. そこで, 前置詞の意味として, Lindstromberg (1998) が主張する〈場所〉と〈時間〉というプロト意味概念に〈手段〉というプロト意味概念を加え, そのうえで, 比喩的拡張によって前置詞の多様な意味を説明すると考えることができる.

前置詞句の意味解釈は, 前置詞と補部である名詞句の意味から与えられるが, 名詞句の意味は, 例えば, Chomsky (1965) *Aspects of the Theory of Syntax* などで提案されている, [±有生性], [±人間性], [±自然力], [±抽象性] といった意味素性だけでは不十分である. 前置詞句の意味をより適切に与えるためには, 名詞に関してもう少し細かな意味分析が必要であることが明らかである. そこで, 名詞の意味を分析する方法として, Pustejovsky (1995) *The Generative Lexicon* で提案されているクオリア構造 (Qualia Structure) のうち特に構成クオリア (constitutive qualia) と目的クオリア (telic qualia) を用いて得られる意味特性を用いて分析する方法が有力であると考えられる.

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計0件)

[学会発表] (計0件)

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況（計0件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

[その他]

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木 英一 (SUZUKI HIDEKAZU)

獨協大学・外国語学部・教授

研究者番号：30004071

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし